

ECOLOGICAL CAMPUS STUDENT COMMITTEE



琉大エコキャン



我がエコキャンにインタビュー。(P1~P3)

琉大生協金子専務理事



琉大生協の洗わずに回収できる弁当箱、リ・リパック。琉大生協の金子専務理事に、リ・リパックの始まりについてお聞きしました。(P4)

二宮あみさん Litterati 沖縄 代表



琉大農学部4年次で、Movement2018代表など、多数のプロジェクトの第一人者として日々活動する二宮さん。今回は、Litterati Japanの活動についてインタビューしました。(P12~16)

沖縄の食品ロスを減らすためにできること

学外スペシャルインタビュー (P8~P11)

NPO 法人フードバンク 2h 沖縄



こんにちは！琉大エコキャンです

エコキャンって何してるの？と、よく質問されます。
ここでは、エコキャンの全貌を説明してしましましょう！！

エコキャンの皆さん、どこへ行くのですか？

共通教育棟の4号館、一階。図書館に行く途中のプロムナード（通りの名前）の方にある扉から入ると、すぐ左手にオレンジ色のドアがあります。

オレンジ色のドアの中は「**えこのま**」。エコキャンメンバーが集まる部屋です。毎日誰かがいて、パソコンとにらめっこしていたり、おしゃべりに花を咲かせていたり。近くを通ったときは、どうぞ覗いてみてください！

エコキャンには、6つのプロジェクトがあり、各班に分かれて活動をしています！
どんなことをしているのか早速聞いてみましょう！

エコツアー

共同溝、図書館など琉大内の環境に関連する施設を学生・教職員や一般の方に紹介しています。琉大生でも知らない事を知ってもらうこと、主催・参加者側双方の教育になることが目標です。7月14日にはオープンキャンパスにて高校生を対象にエコツアーを実施しました。



前期第1回エコツアー

千原池・共同溝・図書館屋上・プロムナードの環境設備を見学しました！



グリーンキャンパス&Plogging

グリーンキャンパスでは学校内の清掃だけでなく、本誌で紹介する Litterarti OKINAWA や海兵隊と一緒に学外での活動も行なっています。

Plogging は海外で流行中の「ランニングをしながらゴミ拾いをする」というものです。のんびり走りながら楽しく行なっています。

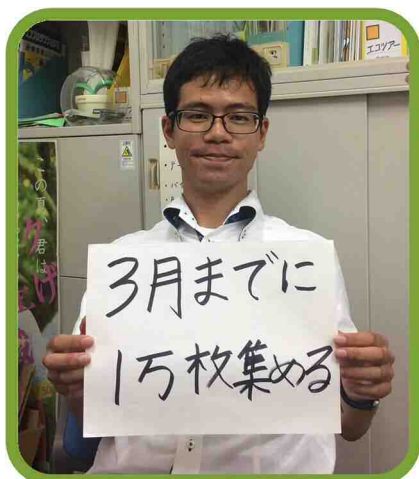


第1回=日本初!

Plogging!

リ・リパック

琉大生にリ・リパックの容器の回収を勧め、リサイクルの動機付けになることが目標です。10万円分以上貯まると組織としてNPO法人に寄付できる(例えばNPO法人メッシュ・サポートなど)ので、その達成のために何年も企画として続けられるようにしたいです。



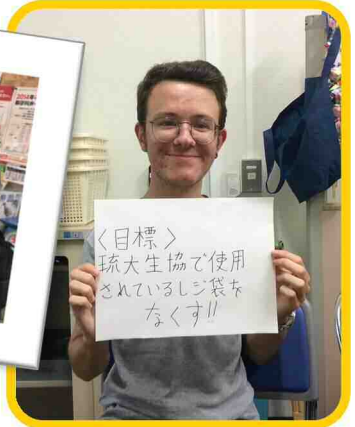
リ・リパック
認知度・実行度調査

レジ袋企画

レジ袋の使用枚数を削減するため、ポスターを作成し学生に対して啓蒙活動を行なっています。また、生協にて昼休みに学生が使っているレジ袋の枚数を調査しました。

レジ袋調査

中央食堂で昼休みに何枚のレジ袋が
利用されるか、
張り込み調査中です!!!



エコアート

琉大内のゴミでヤンバルクイナ、ウミガメのオブジェを作り、ゴーヤを巻きつけることを計画しています。そうする事で、自然とゴミは共生できないことを伝えていきたいです。オブジェに巻きつけるゴーヤは、理学部棟横のベンチでグリーンカーテンを作って育てています。琉大祭までにオブジェの作成を間に合わせることが目標です。



ゴーヤの種植え

AM6:00 に農学部の手原フィールドにて、ゴーヤの種植え作業を行いました。
朝早くからがんばりました!

エコロジカルキャンパス学生委員会は、2012年に設立され、活動を始めてから6年がたちました。学内の環境に配慮した取り組みを学び、身近な環境に対する意識を高めて具体的な行動に移すことを目標にしています。皆さんも一緒に活動してみませんか??

リ・リパックについて教えてください！

Interview

琉球大学生生活協同組合 金子道彦専務理事



いつ、どこで、誰がリ・リパックを導入したのですか？目的は何ですか？

山形県に本社を構える「株式会社ココタ東北」様により、1998年にリ・リパックが誕生しました。開発のきっかけになったのは、1995年に起きた阪神・淡路大震災だったそうです。被災者の方々は、家屋の倒壊、ライフラインの甚大な被害を受けた中、毎日の食事の際にはお皿にラップをしき、食べ終わったら汚れたラップを剥がして水を使わずに済む工夫をされていました。その知恵がリ・リパックの原点になっています。

九州の大学生協での導入は2005年からです。それまでも弁当容器リサイクルを実施していましたが、利用した後に洗う手間がかかるタイプであったため、リサイクル率が低く、導入会員が増えない実態がありました。そこで、現在のリ・リパックを導入しました。現在は全国で148会員が導入をしています。

リ・リパックの活動の目標は何でしょうか。

回収率は最低でも50%は超えたいと思います。

リ・リパックに関して琉大生に一言お願いします。

食べた都度、パックを生協まで持ってくるのは大変かと思います。研究室やサークル単位でまとめられるところは、是非協力をお願いします。



じゅんこの部屋



このコーナーでは、エコロジカルキャンパス学生委員会の担当教員である、大島順子先生にお話を伺います。

Q1. 先生の専門分野の内容と関心を持ったきっかけについて教えてください。

私の専門分野である環境教育は、歴史的に日本では1950年代から1960年代にかけての高度経済成長期に端を発した表と裏の部分である公害のことを学ぶ教育や、日本各地の開発に伴う自然破壊に対する環境保全や自然保護の重要性について学ぶ教育からスタートしたと言われています。学校現場では、「環境教育」という科目はありませんが、学校・地域・NPOが連携し地域の自然や環境保全を教材とした環境教育を総合的学習の時間に取り組んでいることが多いです。現在では、その範囲が環境保全から持続可能な社会へ拡大されてきたこともあり、環境教育は従来の環境保全にとどまることのない、環境や経済、社会、文化を網羅するESD (Education for Sustainable Development : 持続可能な開発のための教育) に近づいてきたといえます。

私は小さい頃から、誰に教えられたわけでもないのですが山とその谷間を流れる沢や渓谷の景色に憧れ、仲間とキャンプに行ったり山に登ったり洞窟探検とかして、いろいろなものが息づく自然の中で多くの体験を楽しんできました。もちろん、ヒヤリとしたり、危ない体験もしてきました。ですので、環境教育に関わるようになったのは、私の子ども時代のそういった影響が強いと思います。

Q2. 先生が琉大生に実践してほしいと思う環境活動は何ですか。また、琉大生に対して一言コメントをお願い致します。

昨年度からエコキャン学生委員会の活動のバラエティさが増しましたね。環境そのものを捉える広がりや活動の可能性に向かってチャレンジしている姿をみていると頼もしいなあと感じます。活動の中には、大学に何か提案する取組みがあってもいいのではと思います。

琉球大学は7つの学部で構成される総合大学で、異なる思考性を持つ学生たちが集まっています。そのメリットを生かして自分の考えや意見を伝え、それらを受容できるコミュニケーション力を身につけてほしいと思います。そして、「鳥の目」と「虫の目」の両方を持って社会で起こっていることを敏感に捉え、自分が学んでいる分野に引きつけながら、自身の興味関心のある活動を(エコキャン学生委員会のメンバーになって!)楽しく続けていってほしいですね。期待しています!

Interview

ウミガメ研究会ちゅらがーみー

ウミガメ研究会ちゅらがーみーは、毎週休みなく活動する、琉大のとあるサークルです。沖縄に上陸・産卵をしに来るウミガメの調査をしています。「地球上に生息しているウミガメは全種、IUCN（国際自然保護連合）のレッドリストにその名前が掲載され」（2009、WWF ジャパン）、絶滅が危惧されている野生生物です。今回は、毎週調査に奮闘する、ちゅらがーみーの部屋をのぞかせていただきました！！

産卵調査：産卵巣を探す→掘る→卵の直径を測定→記録→写真を撮る

孵化率調査：

孵化した産卵巣を探す→掘る→たまごの殻を取り出し、孵化した卵と未孵化卵の個数から、孵化率を算出→記録



▲ 孵化率調査で産卵巣を見つけてやすいように、棒などを立て、目印をつける。



▲ 砂浜に残されたウミガメの足跡



▲ 卵の直径を測り、ウミガメの種類を特定する



<南部調査>

南部の浜に、毎週行き、産卵や上陸がないか調査をします。沖縄本島の中では比較的産卵は少ない地域です。

＜北部調査＞

1日かけて北部の浜に行き、産卵や上陸がないか調査をします。毎週、上陸も産卵も多く確認されます。山を登ったり、海を渡ったりするため、意外と体力勝負です。

＜座間味調査＞

5人という少人数のメンバーで座間味島に行きます。なんと行くたびに産卵・上陸が数十件確認されます。主に、5月から10月は産卵調査を行い、8月から12月にかけては孵化率調査も行います。



混獲調査：

朝5時半に出発し、漁師さんの船に乗り、定置網漁であみにかかったウミガメの体長測定をします。測定するのは、1.標準直甲長 2.最小直甲長 3.直甲幅 4.腹甲長です。

張り込み調査

調査はウミガメ次第です。糸満にある、ウミガメの産卵のために整備された浜で、一晩中張り込みます。

ストランディング調査

ストランディングとは、遊泳能力を持つ海洋生物が浜に打ち上げられることです。カメが浜に打ちあがると出勤します。体長の測定のほか、カメの胃の内容物などを調査します

その他の活動

黒島研修 長期休暇中に黒島に行きます。
日本ウミガメ会議や学生会議に毎年参加しています。



引用 <https://www.wwf.or.jp/activities/basicinfo/3563.html> (2018/08/17)

学外スペシャル Interview

フードバンク 2h 沖縄

那覇市上間の一角で、沖縄の抱える問題に向き合う方々があります。NPO 法人フードバンク 2h 沖縄の皆さんです。賞味期限が残りわずかになったり、包装が破損したりして、廃棄される商品や、家庭で余った食品などを寄付してもらい、必要としている家庭に届ける活動をしています。この活動を始めたのは 2007 年で、早くも 11 年が経ちました。毎日のように大量に廃棄される食品。日本は食品ロス世界トップレベルで、沖縄ももちろん他人ごとではありません。食品ロスをなくしたい、その思い一筋にアクションを起こす皆さんを取材しました。（取材者：森川）



▲ フードバンク 2h 沖縄のみなさん。写真左から、島袋綾子さん、代表の奥平智子さん、池田房枝さん、上原敦子さん。寄付された食品が集まる事務所の前で。

Q1 どのような種類の食材が多く寄付されますか？

島袋さん：缶詰や乾物類、そうめん、お米、飲み物など、常温で置けるものが多いですね。

森川：お野菜の寄付も時々あると聞きました。

島袋さん：時々ありますね。農家さんからニンジンなどの規格外の野菜を寄付していただくことが多いです。中には売り物としてあるものを提供してくれる農家さんもいます。それは寄付でやっていただいています。でも、野菜の場合は冷蔵が必要なので、受け取り先を確認してから届けています。基本的に私たちが届ける先は決まっていて、養護施設や母子支援など、いろいろな団体があります。なので、急に農家さんが来てても、そういった施設に持っていくというルートができていて、対応できるようになっています。

森川：賞味期限はどれくらいの期間残っているものを寄付していただくんですか。

島袋さん：できれば一か月は賞味期限が残っているものをお願いしています。こちらでストックしたものを相手に届けても、相手がすぐに食べるかはわからないので。それでも、中には二週間や一週間のお菓子が来たりします。その時は施設の方にすぐ届けて、すぐ食べてくださいというお約束でやっています。

森川：フードバンクから施設などに届けられる食材は全部消費されているんですか。

島袋さん：食べてもらうのが条件で渡しているのです、そこから人に売ったりするのは、なしです。このことは、施設の事務局と私たちとで、確約書をちゃんと交わして、それに書いてあるいろいろな決まり事項を守ってもらっています。

森川：食べずに廃棄されることはないんですか。

島袋さん：例えばですが、ベース（基地）の中からも寄付が来ていて、そこで見慣れない缶詰があると、ちょっと苦手って方もいらっしゃいます。そのような食材を一人一人がちゃんと食べているのかまでは分かりません。あと、食材に関する説明が英語で書かれているのはわかりづらいですね。あんまりよくわからないのは、炊き方とかを書いたりして工夫をしています。

Q2 フードバンクに寄付される食品は、年間・月間・日間どれくらいですか？ 具体的な数値があれば教えてください。

島袋さん：平成 28 年度（平成 28 年 9 月 1 日～平成 29 年度 8 月 31 日）は、年間 42 トンの寄付がありました。月に 3.5 トンの計算になります。42 トンのうち、約 36 トンは企業から、残りの約 6 トンは個人や団体からの寄付になります。平成 29 年度の目標は年間 55 トンの寄付です。これは月に約 4.6 トンの計算になります。

森川：55 トンは相当な量ですね。

島袋さん：すごいですよね。年々届く量も増えていますね。

Q3 他のフードバンクとはどのような関係があるのですか？

島袋さん：全国各地にあるフードバンクは、東京にあるフードバンク JAPAN の支店と思われ



▲ 企業から寄附された商品

がちなんですけど、それぞれ別々に活動しています。福祉団体から始まって、福祉に特化しているフードバンクもあれば、私たちのように食品ロスの観点、つまり環境面に特化しているところもあります。だから、日本全国にあるフードバンクは一つ一つ違う団体です。私たちは食品が捨てられるのがもったいない、無駄をなくしてほしいという願いから、食品ロスを減らすために始まったものです。食べ物なので、どうしても、福祉の分野に絡んでくるんですけど、私たちは福祉の専門ではないので、全部の市町村の窓口を通して食品の寄付をしています。

Q4 協力してくれている企業とは、どうやって繋がったのですか？

島袋さん：紹介もありますし、私たちの活動を知ってくださって、連絡をくださったりする場合もあります。沖縄の企業だけでなく、内地の企業もあります。他には、毎月ではないんですけど、ゆいまーるやサンシャインなどのパチンコ屋さんがお金を寄付してくださったりもします。あとは大学院大学の OIST とかは、学校にいる先生方が、フードドライブをしてくださっていて、お家で食べないものを持ってきてくれます。沖縄の企業で言えば、かねひでの協力などが大きいです。週に一回沖縄県全部のかねひでから、ラベルがはがれたり、賞味期限が間近だったりする商品が集められて、全部フードバンクに寄付をしていただいています。とても助かっています。

Q5 食品ロスを防ぐために私たちができることは何ですか？

上原さん：個人で言えば、消費期限の短いものから使い切る。どうせ今日使い切るなら、明日や明後日の消費期限のものから買って欲しいです。

島袋さん：人間の心理としては、賞味期限の長くのこっている方から買いたくなりますけどね。スーパーのお勤め品コーナーとか、見切り品コーナーとかから選ぶことで、お店も廃棄する分が減るので食品ロスを防げます。

上原さん：自分で判断できなくて、期限が過ぎているから捨てようって方が結構多いと思います。でも、味覚・嗅覚で判断して、食べものを選んでほしいです。

Q6 今後の展望と目標を教えてください。

島袋さん：若いボランティアが増えることを望んでいます。

上原さん：琉大とかの学生さんは、話は聞いてくれるんですけど、ボランティアは足がないとか、バイトとかでなかなか来てくれなくて。ちょっとでも来てくれると嬉しいです。また、クレジットで 200 円から寄付もできます。

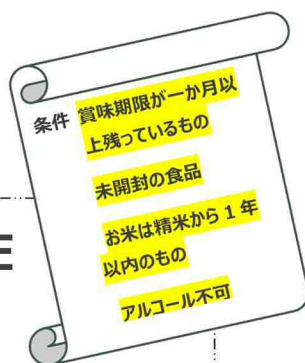
奥平さん：琉大生の皆さんにボランティアとして、おうちにある食品の寄付とかしてほしいです！

奥平さん：沖縄の企業がまだ少なく、もっと沖縄の企業にフードバンクが意味のあることだと思ってほしい。圧倒的に食品が足りないのに、間違いなく県内で捨てられているから、それらが活かされることでもっと助かる人が増えるだろうし。

奥平さん・上原さん：10年やってきて、まだまだ認知度が低いので、広報してもらえるととてもありがたいです！！

最後に、食料・食品を無駄にしないためにできることを教えていただきました！！

- ① 食品棚や冷蔵庫をチェックし、無駄に食材や保存品を買わない
- ② 買いだめしない
- ③ 葉や茎もできるだけ使う
- ④ 期限にこだわらず、五感で判断する
- ⑤ 食材の保存方法を考える
- ⑥ 余った食材や料理をアレンジ
- ⑦ 外食時など注文しすぎない
- ⑧ 外食が余ったら Doggy Bag で持って帰る
- ⑨ 食べ残しをしない、食べ物に対して感謝をする



FOOD DRIVE

フーズドライブ

いろいろな場所で食べ物を集める活動を「フードドライブ」といいます。あなたも職場や仲間と一緒にフードドライブをやってみませんか？

>>STEP1 フードドライブを実施する場所と時間を決める

人が集まる場所や機会を見つけ、時間を設定する。（学校や職場、サークルや模合など）

>>STEP2 フードドライブの実施を事前広報する

フードドライブの実施や内容を周囲の方へ伝え、集める食品の条件などを書いたチラシを事前に配布します。キーワードは「もったいないをありがとうへ」です♪

>>STEP3 期間中、旗やのぼりを設置する

寄付された食品は、期限をチェックします。いたずらなどをされないように人目のつくところで集めてください。

>>STEP4 集めた食品はフードバンクへ

期間が終了し、食品が集まったらフードバンクへご寄附ください。寄付食品はフードバンクへお持ちいただくか、受け取りに伺います。

Interview

Litterati Japan



琉大の学生が始めた活動、Litterati。SNS 上で見たことがある方も多いのでは？？一体どんな活動をしているのでしょうか。今回は、Litterati Japan 代表の二宮あみさんがお話をしてくれました！！（取材者：森川）

二宮：私たちは、Litterati Japan という名前で活動しています。そもそも Litterati というのは、ポイ捨てごみの意の「Litter」と「art」を掛け合わせた造語です。写真を使ってポイ捨てごみをデータ化していきましょうという活動と、このポイ捨てごみの写真をおしゃれに撮って、自分が写真で撮ったごみは自分で拾い、そして、撮った写真に「#Litterati 沖縄」を付けて SNS に投稿するっていう流れで今、やっています。団体としてはこの活動を広げるために月に 1 回ごみ拾いのイベントをやっています。

森川：最近はどこで活動されたのですか。

二宮：最近では 6 月末にコザで実施しました。そこでは、コザの魅力発信をしている大学生や現地を中心に活動されている団体とコラボレーションをしました。

森川：へえ、そうなんです。遠くまで行くこともあるのですか。

二宮：一番遠かったのは、名護の房美地区っていうところですよ。すごく過疎地域だけど湾があります。でも、その湾にごみがあっても、おじいちゃんとおばあちゃんしかいなくてごみを取りきれないので、代わりに学生が行いました。ごみ拾いのみならず、地域の方々との交流にもなりました。



このように、私のイベントとしては、「ごみ拾い」+「地域の人との交流」のように、Litterati の活動を通じて、もう一つ別の付加価値をつけられるように工夫しています。

森川：Litterati には、一般の学生も気軽に参加できるのですか。

二宮：はい、誰でも参加できます。

二宮：毎回 Twitter とかで予告していきまして、参加応募フォームを載せているので、そこで参加の申込をすることが

できます。あとはLINE@に登録してもらおうと、イベント情報などが流れてくる仕組みになっています。

森川：情報の発信などは全部二宮さんがされているのですか。

二宮：私たちは学生団体で、学生7名で役割分担しながら、Instagramのアカウントで毎日投稿したり、イベントを作ったり、運営する上で色々やっています。



森川：この活動を始めようと思ったきっかけはありますか。

二宮：もともと環境問題に興味があって、私の学科も自然の植物を使った研究をしています。その中で2年前ぐらいにサンゴの養殖事業をやっている金城コウジさんという方から「沖縄のサンゴはもう絶滅しそうな状況にある」というお話を聞いて、その時に「自分は自然を使った研究をしているけれど、そもそも自然って今、守らなければ無くなるのではないか。そうしたら今自分がやっている研究は意味があるのか。自然があることを前提として、動くのって間違っているのではないか。」と思いました。そこで、環境問題に対してできることは何かと考えました。当初は、最初はサンゴについて何かやりたいと思っていましたが、サンゴの保護活動って、実は効果的なことがあまりないようで、研究者の方にも学生にできることは少ないと言われました。

森川：そんなことがあったんですね。

二宮：「まあ、頑張ってる。」みたいなこと言われちゃって悔しかったです。でも、いろいろ調べていくうちに、海にポイ捨てされているごみや漂着ごみが、サンゴの生育を阻害しているということを聞きました。で、実際に海に行ってみたら結構ポイ捨てごみがたくさんあって、ごみ拾いしようかなと思った時に、ちょうどアメリカのLitteratiを知りました。

森川：そうなんですか。TEDですか？

二宮：そうそうそう。創設者のプレゼンを見て、これを日本に持ち込んだら絶対流行ると思いました。調べてみたらLitteratiを日本でやっているところはなかったですね。

森川：日本初上陸だったんですね。

二宮：それで、そのままLitteratiの本社の方にメールをして、日本で立ち上げたい旨を伝えたら「是非やって下さい」と言われました。アンバサダー（大使）として、日本代表で今やっています。

森川：だから「日本代表」なんですね。びっくりです。

二宮：これが去年の4月のことですね。

森川：まだ1年なんですね。

二宮：まだ1年。1年休学して、Litteratiとして色々やっています。それで、現在に至りました。今は沖縄と福岡と東京と、たぶん来月ぐらいからから青森が動き出します。日本の中でもどんどん、学生中心に広まっていますね。

森川：それはどうやって広まっていったのですか。



二宮：福岡は友達伝いですが、他の県ではあちらの方からです。もともとごみ拾いしている学生から連絡が来ました。あ、どうぞお好きにみたいな感じです。

森川：この活動をするとき、どのような思いでこのごみを拾い、写真を撮られているのですか。

二宮：私は、ポイ捨てがあるという現状や、ポイ捨てごみを拾っている人がいるということ発信したいなと思っています。例えば、もし友達がごみを拾っていたら、自分はポイ捨てしにくくなりますよね。

森川：そうですね。

二宮：そうやってポイ捨てしにくい雰囲気やSNSで作っていきなうって。Litteratiはそういうポイ捨てへの抑止力になるので、ポイ捨てごみ、そしてポイ捨て行為自体を少しずつなくしていきたいと思っています。私たちがはじめとしたごみ拾いの団体が活動する必要のない沖縄を作っていきなうってと思っています。きれいな沖縄や、きれいな日本を作っていきなうたいです。

森川：素敵ですね。

二宮：ごみ拾いってハードルが高いじゃないですか。凄く良いことだけど、ボランティアだし、自分が足を運んでまでやるのかということがあると思うので。ただ、若者向けに、インスタ映えやもうちょっと楽しい運動、といったイベントにプラス何かがついてくるといった取り組みで、ごみ拾いのハードルを下げたいです。

森川：学生の皆さんは琉大生が多いのですか。

二宮：琉大生が4名、大人2人と、専門学校のハイテクカレッジっていう環境系の、自然科学系の勉強している人が1人、計7名で運営しています。5名がイベントの運営をやっている、デザイナーの子がTシャツを作ったり、ポイントカードのデザインをしたりしています。

森川：活動資金はどこから来ますか。

二宮：協賛企業があります。まだ少ないですけどね。

森川：最初は1人だったのですか。

二宮：うん、最初は全然、団体とかにする気もなく。とりあえず地道に1人でやっていたら、人が集まってきて、一緒にやりたいと言われました。

森川：えー、いいですね。

二宮：これからはスケールを大きくするための活動もやっています。例えば、今は発信することだけで終わっているのだけど、さらに発信をきちんとデータ化するような仕組みを整えたり、ホームページを作ったりしています。

森川：次から次に広がっていきそうですね。

最後に、琉大生の皆さんにメッセージがあったらお願いします。

二宮：結構琉大ってポイ捨てごみが多いなっていう印象があります。大学だからとか、学校だから捨てても大丈夫だ、誰かが拾うとか、誰かがきれいにする、っていう考え方は違うなと思っていて。ごみはごみ箱に捨てるという、当たり前のことを当たり前前にやってほしいと感じますね。Litteratiが必要なくなればいいなと思っています。

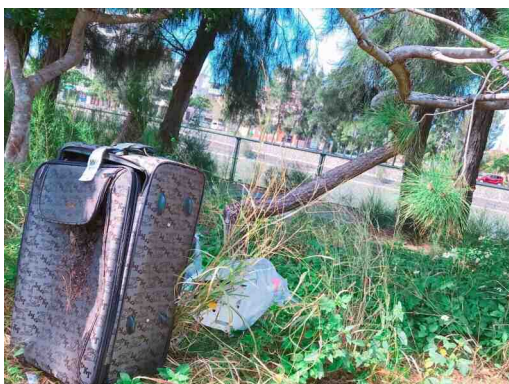
Your Name

[How to Litterati]

- 1 ポイ捨てゴミの写真を撮る
 - 2 撮ったゴミを拾って捨てる
 - 3 SNS に写真情報・#litteratokinawa をつけて投稿
・イベント中に Litterati を投稿した数だけポイント押印します。
(Instagram・Twitter・Facebook への投稿に限る)
- ・有効期限は「ポイ捨てゴミがなくなるまで」です
・ポイントが貯まると Litterati オリジナルグッズをプレゼント!



▲ Litterati Japan のポイントカード



二宮：やっぱり次の10年や20年を担っていくのって、自分たちが、琉大生が中心になっていってほしいなって思っています。そうなったときに沖縄全体に対してもっと目を向けてほしいと思います。Litteratiは沖縄の全範囲が活動範囲で、いろんな場所でイベントなどをやっているのだから、参加していただけたら嬉しいです。

森川：今日は素敵なお話をありがとうございました。

▼ ポイントカードには、SNSのQRコードがおしゃれに並ぶ



二宮 あみさん Profile

Q. 趣味は？

A. 読書

Q. 今、熱中していることは？

A. 沖縄のカフェ巡り！

Q. 好きな言葉は？

A. 「暗いと不平を言うよりも、
あなたが進んで明かりをつけなさい」

(マザー・テレサ)

参加しているプロジェクトなど

- ・ Litterati Japan 代表
- ・ G1 カレッジ学生運営委員会
- ・ 沖縄国際映画祭学生応援団連合会会長
- ・ やんばるアートフェスティバル学生運営委員会委員長
- ・ Movement2018 代表
- ・ (一社) 沖縄県環境・エネルギー開発機構非常勤研究員
- ・ (株) パラドックスブランディング長期インターン

編集部員 N の雑記

“ファッションと環境”

無類の服好きである編集部員 N がファッションの視点から環境問題について考えるコラム



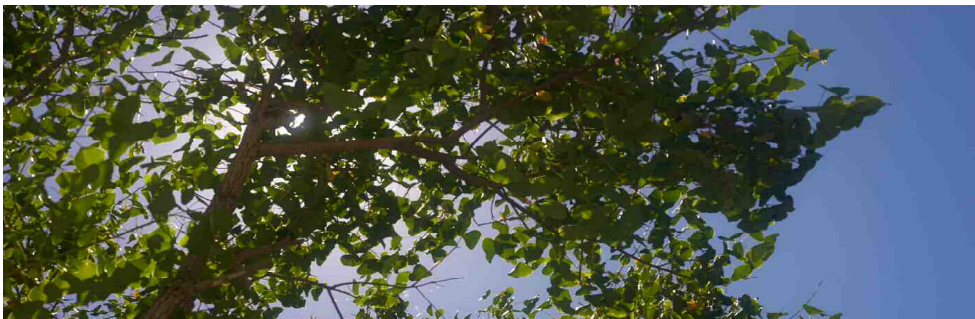
ブランド保護か環境保護か

先日、ネットニュースを眺めているとこんなニュースが目飛び込んで来た。

「英バーバリー、42 億円相当の売れ残り商品を焼却処分」

どうやらイギリスの高級ブランドであるバーバリーが昨年、衣料品からアクセサリ、香水に到るまで約 42 億円相当の売れ残りを破壊・処分していたらしい。これを聞いた多くは「どうして焼却する必要があったの?」「セールにかければいいのでは?」と思ったに違いない。しかし、どうだろう、もし自分がロイヤリティをもつブランドがセールで商品を叩き売りしていたら。それは決して気持ちの良いものではないだろう。

ファッション業界における「環境保護」と「ブランド保護」という二つの保護の間には、このようなジレンマが往々にしてある。今回のバーバリーの件は氷山の一角に過ぎない。同様の問題を抱えるブランドは山のようにある。そして、今回の一件で最も問題視しなければならないことは、焼却したことでその処理方法でもない。それだけの余剰在庫が存在したということだ。結局在庫が余るということは、過剰生産をしているということに他ならないのだ。したがって、在庫処理の仕方について議論するよりも、まずは在庫を余らせない工夫について話し合うべきではと、私は思う。何はともあれ、今回のニュースで、結果としてバーバリーのブランド価値が下がってしまったのは何とも皮肉なものである。



編集後記

広報の仕事 今まで経験したことがなく、知識が少なかったのでフリーペーパーを作成するのに苦労しました。しかし、色々な方に取材ができ、環境に対して様々な考えがある事を知れたので楽しかったです。忙しい中、インタビューのご対応をしてくださった方々には感謝を申し上げます。（川中子）

大学に入学して、琉大エコキャンの一員として活動を始めたことで、初めてフリーペーパーを作成することができました。先輩方に教え導いていただき、友人たちに手伝ってもらい、ここまで来ることができたので、感謝の気持ちでいっぱいです。取材に応じてくださった皆様、お忙しい中、快く応じていただきまして、本当にありがとうございました。この場をお借りして、感謝申し上げます。沖縄で活躍されている方々の影響を受け、私も日々、だれかのために、環境のために、邁進していく覚悟です。（森川）

どうも編集部員 N です。僕は口出しばかりで大した仕事をしていないので、編集後記でもそのまま編集部員 N とさせてください。それにしても、この少人数でこれだけのクオリティとボリュームのフリーペーパーを作り上げたことは本当に凄いと思います。二人とも本当にお疲れさまでした。



エコロジカル・キャンパス
学生委員会公式 SNS



@ecocanryukyu

